



たか 財やちよ



2017. 12. 15
(平成 29 年)

八千代市指定文化財 ～村上の神楽・羯鼓～

八千代市指定文化財の村上^{かぐら}の神楽は、村上地区^{うぶすな}の産土である七百餘所神社の祈年祭（1月15日）と例祭（10月9日）に境内にある神楽殿で、村上神楽保存会により舞われます。神楽は千葉県内の約 50 カ所余で舞われており、特に下総地方で多くみられます。

神楽とは神霊^{しんれい}の宿る座^{やど}を意味する神座^{かむくら}から出たもので、神を招いて巫者^{まね}の体に宿らせ、神

村上の神楽の起源

村上の神楽がいつ始まったのか定かではありませんが、周辺で、村上の神楽に関する伝承^{でん}が残っています。

浦部^{うらべ}（印西市）の神楽は、口伝では、江戸時代初期に宮内（八千代市村上）から移入されたものであるとされ、さらに富塚^{とみづか}（白井市）の神楽は、150 年位前に印西の浦部より教わったものと伝承されています。さらに富塚から塚崎^{つかさき}（柏市沼南）に教えたと言い伝えがあり、高根^{たかね}（船橋市）の神楽は、富塚の神主の娘が高根の

村上の神楽で舞われる舞

村上の神楽には元々 12 座の舞があったといわれ、現在も舞われているのは修祓^{しゅぼつ}・座清め^{ざきよめ}・翁^{おきな}の舞^{まい}・種おろし^{たね}・鈿女^{うずめ}の舞^{ゆみこ}・湯巫女^{たまり}の舞^{たま}・玉取様^{たまとりさま}・恵美須^{えびす}・甕乾^{みかぼし}の 9 座で、残り 3 座の内 1 座は剣^{つるぎ}の舞であったと伝えられています。

舞に先立って神楽保存会の会員が神楽殿に上がり、神主が祝詞を奏上^{かんぬし}した後に舞が始まります。舞は笛と太鼓に合わせて舞われ、ミコ・テング・オカザキ・ミカボシ・サンジン・ヒル

わざや託宣^{たくせん}を得るための動きが舞となり、様式化され、芸能としての神楽になったと考えられています。

神楽には宮中^{きゅうちゅう}で伝承されてきた「御神楽^{みかぐら}」と、全国各地に伝わる庶民^{しよみん}が舞う「里神楽^{さとかぐら}」があります。里神楽はさらに細分され、巫女神楽^{みこ}、出雲系神楽^{いずもけい}、伊勢系神楽^{いせけい}、獅子神楽^{しし}に分かれ、村上の神楽は、このうち出雲系神楽^{いずもけい}に属します。

神主の家に嫁いだ縁で富塚から教わったとされています。

口伝に従えば、少なくとも江戸時代初期には既に村上の神楽が舞われていたこととなります。また、神社に伝わる、かつて村上の神楽で使用されていたと考えられる楽器の一つ、市指定文化財の羯鼓^{かっこ}には、内部に天正十一年^{てんしゅう}の墨書^{ぼくしよ}銘^{めい}があります。天正十一年は西暦で 1583 年です。はっきりとしたことはわかりませんが、神楽の起源^{きげん}とも関係があるのかもしれませんが。

コ・ユタテ・スグズンと呼ばれる曲目の組み合わせで演奏されます。このうちスグズンは鈿女^{うずめ}の舞で、矢を放つわずかな間のみ演奏され、ユタテは祈年祭で行われる湯立^{ゆだて}の神事で演奏されます。

神楽終了後は、演者らが神楽殿や社殿の上から餅等を播きます。この餅は地元の氏子^{うじこ}が奉納^{ほうのう}したもので、氏子は、当日 12 個の餅を奉納し、代わりに別の 1 個を持ち帰ります。

①修祓



かんぬし
神主

神主が神楽殿及び奉仕者
を祓い清めます。

②座清め



ひょうてこ
火吹男

火吹男が神様を迎える前に帚で神楽殿を掃き清め、猿田彦命が
神様のお越しを願います。猿田彦命は道案内をする武勇ある神
で、邪神を退散させる祓いをします。



ざるたひこのみこと
猿田彦命

③翁の舞



かすがさま あめのこやねのみこと
春日様(天兒屋根命)

祭祀の業を掌り、平和な村落の生
活を寿ぐ姿をあらわしています。

④種おろし



いなりさま うがのみたまのみこと
稻荷様(倉稻魂命)

五穀の神様である稻荷様(倉稻魂命)が畑を耕し、土をならし
て種を蒔く準備をし、そこに狐が種を蒔きます。



きつね
狐

⑤鈿女の舞



あめのうずめのみこと
天宇受売命

弓矢を持って舞う。これは的を射て豊
凶を占うオビシヤを模しています。

⑥湯巫女の舞



あめのうずめのみこと
天鈿女命

天の岩屋の前の神楽より始まって心を喜ばし熱湯を
浴するもので、湯立て神事を模しています。

⑦玉取様



ひめ
姫



おに
鬼



さんじん
山神

姫は大事な宝物（玉）を手を持って舞い、豊かで平穏な生活を表しています。そこへ鬼（悪霊）が出て、玉を奪い平和を乱します。そこで山神が取り戻し再び平和が蘇る様子を表しています。

⑧恵美須



えびす
恵美須



おかめ
おかめ

釣竿を持った恵美須は、おかめを釣り上げます。後世の七福神の影響で成立した舞なのかもしれません。

⑨甕乾



火吹男
火吹男



山神
山神

火吹男が神祭の場に現れて、供えてある餅を見つけて喜んでいます。そこへ山神が現れて、火吹男から餅を取り返して神に供えなおします。最後は神送りの場となります。「山廻り」で神々の座す山を山神が巡察して従者を懲らしめている姿を表し、この後、神々が帰られます。

湯立て神事

祈年祭では、神楽の後に湯立て神事が行われます。神楽殿前に 1m 四方の四隅に幣束を縛り付けた篠竹を立て、注連縄を張った内に大釜を置いて火を焚き、湯を滾らせてあります。神楽が終了した後、餅播きの前に行われます。神主が祝詞を奏上し、大釜の中に米と塩を入れ、篠竹に縛り付けられている幣束の 1 本をはずし、これで釜の中の湯に秘文字を書き、両手で印を



結びト占の仕種をします。その後、熊笹の幣で熱湯を周囲に浴びせ、最後に自らも湯を浴び忘我状態になり、神楽保存会の若者に担がれて拝殿に運ばれ神事は終了します。残された笹の幣は見物人が取り合い、その笹で残った湯を自らの体に振りかけ、一年間の無病息災を祈願します。また、篠竹に結び付けられた幣束は安産祈願のお守りになります。



七百餘所神社の鞆鼓

鞆鼓は神楽等で演奏される太鼓の一種で、桶状の胴の両側に紐で革を張ったもので、2本のバチで演奏されます。革枠径40センチメートル、胴径28センチメートル、胴長54センチメートルで、胴は桐材でつくられています。神楽の起源で触れましたが胴の内側には「七百餘所大明神 天正十一年癸未卯月八日作之」と墨書されています。他にも追記と考えられる享保十五(1731)年の墨書や、革の内側には明治二十六年に購入したとの記載があります。この鞆鼓が伝わる七百餘所神社は、伝承によれば弘安年中



鞆鼓

(1278~1288)の創建と伝えられています。珍しい社名は、神社の所在する村上の地名の由来が群神にあり、群れる神、つまり、多くの神様が集まる所であることから七百餘所という名がついたとも、神社の北西にある米本城が落城した際に、家臣等七百余名がここに逃れ、自刃したからともいわれています。

千 葉 県 印 旛 郡 阿 蘇 大 字 村 上	明 治 二 十 六 年 二 月 十 五 日	革 内 側 の 墨 書 銘	御 □ □ □ □ 享 保 拾 五 年	覚	千 時 天 正 十 一 年	七 百 餘 所 大 明 神	卯 月 八 日	作 之	胴 内 部 の 墨 書 銘

七百餘所神社の位置は、「財やちよ No. 1」をご参照ください。所在地⑰です

編集・発行：八千代市教育委員会教育総務課文化財班
〒276-0045 八千代市大和田 138-2
電話 047(481)0304